

2015年度学校自己評価

はじめに

2015年度は、95号館を中心とした校舎での教育・研究も定着し、さらに90-7号館の改修が完了して稲稜ホールを使用が開始され、それに伴い34年間本学院の授業・行事に大きな役割を果たしてきた大教室が閉鎖されるという変化があった年であった。また文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SGH）にも指定され、新たな教育・研究活動が始まった年でもあった。

現制度で7度目となる15年度の学校自己評価は、従来と同様、まず各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照しつつ、授業・卒業論文・クラブ活動・研究活動等について評価し、さらに本学院内の教務室・各委員会・各学年・事務所等がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめて評価を行なった。本自己評価が16年度以降の教育・研究の改善に資することを望むものである。

I. 理念・目的

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すとした。さらに、創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的であるが、生徒に対しては、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は15年度においても変わっていない。

Ⅱ．教育活動

①授業

a．新カリキュラム・文理コース

2015年度は新カリキュラムが導入され、第1学年は新カリキュラムによる授業が行なわれた。すなわち、これまで第2学年に3単位で行なっていた「物理基礎」を2単位科目として設置し、「化学基礎」1単位が第2学年に移行した。また第2・第3学年については従来のカリキュラムによる授業が行なった。

新カリキュラムでは第2学年から文系コースと理系コースに分かれるため、第1学年では11月に次年度に向けてコース分けを行なった。その結果文系コース選択者 161名、理系コース選択者 193名と理系選択者が文系選択者を大きく上回るようになった。新カリキュラムでは第2学年から第3学年に進級する際、理系コースの生徒の文系コースへの転向は認められるので、選択の幅を増やしておきたいという生徒が多かったと思われる。

また、17年度から第3学年で実施する教科横断型科目「大久保山学」の実施方法について、設定曜日や時間、評価について枠組みが決定された。加えて、文理コース分けを導入するにあたって、進学要件を見直しも行なった。

b．必修科目

15年度の必修科目は、14年度の生徒の授業評価の結果を分析・検討したうえでシラバスを作成し、それに沿った授業が展開された。各教科とも第1学年では主に基礎力重視の観点から中学校の内容との連続性を意識した展開、第2学年では充実・発展の観点からの構成を考えた。第3学年では学部教育との連携を意図して、各科目の特徴に基づいた授業を行なった。これまでも「わかりやすい授業」、本学院ならではのオリジナリティーの追求、探究や思考力を高め、生徒が主体的に取り組めるような授業形態が目指されていたが、95号館完成から4年が経過し、全教室に設置されているPCや書画カメラ、オーディオ等の教育機器を使いこなした授業を行なった。情報の授業におけるプレゼンテーションを想定した授業形態は、公民や英語の授業でも積極的に取り入れられている。

本学院は多様な入試形態で生徒を入学させているため教科によっては個別の対応が必要なものもあるが、特に帰国生の数学や理科では補習や長期休暇明けのテスト等を恒常的に行なうことで対応している。また近年学部から強い要請のある英語能力の向上については、語彙力の強化に特化して、第1学年と第2学年を対象に授業中に小テストを実施し、一定点数に達しない者には放課後に更に繰り返し小テストを行なったり、Course N@vi上に教材を提示し、それを用いた予習を行なってから授業に臨ませることなどを試みた。

ただ「自ら学び自ら問う」という本学院の学習の基本姿勢である探求型学習で求められる「じっくり考える」ことになじめず、与えられたことをひたすら暗記し試験でそれを再現するだけに留まる生徒も多い。その結果点数至上主義に陥いる生徒や結果のみを安直に求める生徒がいることが問題点としてあげられる。

c. 選択科目

本学院のカリキュラムの特徴として、第3学年で豊富かつ多様な選択科目を履修させていることが挙げられる。15年度も14年度と同様、7科目14単位を選択する規定であった。そのうち第2外国語は「中国語」、「ドイツ語」、「フランス語」、「スペイン語」の4科目が非常勤講師によって教えられたが、「朝鮮語」と「ロシア語」は履修希望者数が規定数以下となり閉講になった。その結果、設置講座は101となった（理系学部進学者の選択必修科目である数学・物理の2科目を3科目として数える）。選択科目は学部への導入的な性格をもつものが多い。例えば基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部（理工3学部）進学者の基礎力充実のため、「化学」では小テストやその追試、「数学」では到達度試験を多用した。また「政治学基礎演習」や「国際関係論基礎演習」は学部の社会科学系学問の入門を意図して、「法学基礎演習」では法学部のゼミで求められる作法・技術の習得、「法学入門」では受講生の議論を深めること、「近現代の世界」では論文執筆指導やプレゼンテーション技術の習得を図った。さらに英語科目においてはレベル別に多様な科目を設置して大学で求められる英語力を身に着けることを企図した。

学部推薦時に外部テストのスコアの提示を求める、あるいは具体的な基準を設定する学部が多くなっているため、それに対してどのように対応するか、既存のカリキュラムの中での対応を模索した。そこで毎年4月と9月の年2回、GTEC-S、TOEICを全学年一斉に実施して評価に組み入れ、また選択科目の「英語Ⅲ」において、定期試験でTOEICのスタイルを取り入れて実施するなど、学部の要請に答える方策を講じた。

d. 卒業論文

原級生も含め323名が提出した。平均点は77.2点（100点満点）で、14年度より1.2ポイント上昇した。ここ数年、卒業論文の評価が高すぎることで指摘されているが、問題はさらに大きくなったことになる。そのなかで「安価に制作でき実用的な水中で探索が行える小型水中ロボットの開発」・「LSD-SLAMを用いたSLAMと水中ロボット制御への応用」・「日本の小河川環境に適した超小型水力発電機の開発」・「本庄市内の河川に生息するプランクトンと水素の相互的關係性」・「小型潜水型水中探査ロボットを実現するためのソフトウェア開発」・「本庄市内河川における外来エビの状況とその理由」の6本が学院賞を受賞した。

卒業論文のための時間が設定されていないなか、各教員は章立て、注のつけかたなどの論文の書き方の基本に始まり、インタビューの方法、文献検索法や資料の引用法などを指導した。その際、制度化されている中間報告の他、継続的な課題の提出、放課後や夏期休業直前、あるいは休業中に個別指導を行なうなど工夫を重ねたが、日程調整は特に多数の生徒を指導する教員や出校日数が少ない非常勤講師の場合かなり困難であった。それを大学キャンパスでの指導、EメールやCourse Naviの利用等である程度補ったが、指導体制の整備は課題として残ったままである。

e. 卒業論文報告会

2月17日(水)に第2学年全員と第1学年希望者を対象に卒業論文報告会を開催した。本学院から3名、また慶應義塾湘南藤沢中高等部から1名が、論文の概要やその作成過程を報告した。論文のタイトルは以下の通りである。

「千と千尋の神隠し」論 ～希望のヒロインと油屋を築く歴史と伝統～

「安価に制作でき、実用的な水中での探索が行える小型水中ロボットの開発」

「グリム童話の継母たち～継子いじめの真相～」(慶應生)

「意思決定における相対性に関する研究」

いずれの報告も、本報告会の目的である、第2学年に対する論文作成への意識づけ、論文とレポートの違いの認識等に役立つ内容であり、質疑応答も活発に行なわれた。参加した1、2年生も満足できる内容であった。15年度はSGH成果報告会が引き続き行われたこともあり、終了後の両校の交流が例年のように行なえなかったという課題が残った。

②課外教育

a. 稲稜祭

10月24日(土)・25日(日)に開催した。学外からの来場者は両日合わせて3000名程度であった。運営は主に稲稜祭実行委員会(48名)が行なったが、委員会は委員長を中心によくまとまっていた。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・本部企画で構成された。「新穂」をテーマに、稲稜ホールの使用や校舎外での食品の模擬店などの改革が生徒自身の力により行なわれ、校内装飾にも力が入れた。

b. 体育祭

6月4日(木)に開催した。実施種目は以下のとおりである。個人トラック種目：100m(男子・女子)・200m(女子)・400m(男子)・1500m(男子)・本庄スペシャルリレー(男子・女子)、個人フィールド種目：走り幅跳び(男子・女子)・走り高跳び(男子・女子)、砲丸投げ(男子・女子)、個人レクリエーション種目：障害物競走(男子・女子)、パン食い競走(男子・女子)、三人四脚(男子・女子)、団体レクリエーション種目：大縄跳び(男子16名・女子8名)、綱引き(男子24名・女子10名)、全員リレー：(1年―男子29名・女子16名・合計45名、2年―男子31名・女子17名・合計48名、3年―男子28名・女子15名・合計43名)。

準備は体育行事实行委員を中心に進め、競技運営も審判には陸上競技部の部員達が行ない、実行委員を中心にした運営が年々スムーズに行なうことが出来るようになってきた。クラスの応援にも力が入り、新しいクラスのまとまりに大いに貢献したと思われる。高校生活の思い出に残る行事として、改めて大きな意義が感じられた。

c. 球技大会

第3学年の修学旅行期間の10月1日(木)に1・2年生で開催し、種目は例年通り、男子はサッカー・ソフトボール、女子はバレーボールであった。それぞれの種

目は、各競技のクラブ員たちの審判と実行委員のスムーズな運営で、滞りなく行なうことができた。

d. マラソン大会

12月12日（土）に、体育授業の一環として男子約10km、女子約5kmの大久保山をめぐるコースで開催し、コースは若干の変更をしたが、14年度と同様、通行ゲートの関係で野球場からのスタートとした。スタート時に数名の生徒が倒れるアクシデントがあったことが大きな反省点である。大きく遅れる生徒は少なかったが、体調不良で途中棄権者が1名あった。ただ女子は5kmを満たしていないコースであり、今後検討を要する。

e. 人権教育

9月30日（水）に北村年子氏（一般社団法人「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」代表理事・ノンフィクション作家）による人権教育講演会を行なった。

「ホームレス襲撃と学校のいじめの相似性」をテーマに、他者に対して優越感を持つのではない真の「自己尊重」（自己肯定感）を育むこと、命の尊さについて改めて学ぶ機会となった。講演会を前に授業時間を利用して事前学習も行なった。

f. 芸術鑑賞教室

11月4日（水）に「落語」および「落語ワークショップ」を開催した。14年度まで本庄文化会館を会場にして、全学院生が同時に同じ演目を鑑賞する、というスタイルをとってきたが、15年度は初の試みとして、稲稜ホール（落語）と共通棟体育室（落語ワークショップ）の2か所展開をして、学院生が移動しながら両方の内容を楽しむこととした。落語家の細かい表情や技術を間近で鑑賞することを意図したが、それはおおむね成功したと考えられる。演者は金原亭馬玉（落語）・春風亭小柳枝（落語）・林家正楽（紙切り）であり、生徒は名人芸に触れ、経験の幅を広げたようであった。

g. 早慶野球戦観戦

第1学年は5月31日（土）、入学後最初の校外学年行事として、明治神宮野球場において早慶野球戦を観戦した。雲一つない青天に恵まれ、強烈な日差しの中、生徒・教員ともども真っ赤に日焼けをしながら応援した。各自が水分補給に努めたため、熱中症等による体調不良者が出なかったことは幸いであった。4－0で勝利した早大側の観客席は大変盛り上がり、皆で肩を組んで何度も「紺碧の空」を歌った。大学の応援部員として活躍していたり、観戦に訪れたりしていた本学院卒業生の元気な姿を多く目にしたことも収穫であった。

h. 秋の学年行事

第1学年は10月2日（金）、谷川岳・水上方面への校外学習を実施した。例年の訪問先である小諸懐古園を避けたのは、火山活動を活発化させていた浅間山の影響

が懸念されたためである。ロープウェイで谷川岳に登って天神平を散策したり、沼田でりんご狩りをしたり、水上の道の駅に立ち寄ったりして、大いに楽しんだ一日であった。

i. 課外講義

1) 「交通安全・防犯講話」(第2学年対象)

5月22日(水)、第1学年オリエンテーションの一環として実施した。本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行と登下校中の防犯に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。講和の中で防犯に関する内容を扱ったのは14年度からであり、15年度が2度目であった。

2) 「こころの健康」(第1学年対象)

5月28日(木)に大学学生相談室の専任心理専門相談員を講師に実施した。入学時の緊張が少し緩み、勉強面や人間関係での不安が芽生えやすい時期であり、相談室のガイダンス的な意味も含めての講義であった。

3) 「依存症の実態と予防」(第2学年対象)

10月29日(木)に久里浜医療センターの医師を講師に実施した。飲酒・喫煙・薬物問題について、現場で治療にあたる医師から最新の知識を得た。

4) 「青年期のセクシャルヘルス」(第3学年対象)

11月5日(木)にNPO法人「ぷれいす東京」から講師を招いて実施した。長年HIV感染者のサポートにあたっている講師から、HIV感染者の実際のエピソードを聞き、パートナーとの関係性、コミュニケーションのあり方を学んだ。

③課外活動

a. 生徒会活動

主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲稜祭の運営であった。15年度の執行部も、14年度に引き続き、生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。特に自らの企画・運営によって9月18日(金)に「献血ボランティア」を行なったが、これは、赤十字血液センターへの問い合わせから、生徒への協力依頼までを生徒会の企画・運営によって行なう、というものであった。このように、教員の関与を最小限にとどめ、生徒の自主的な生徒会活動が展開されていることが本学院の特徴である。

b. クラブ活動

15年度は14年度と同様、文化部門25、体育部門16のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。各クラブの15年度の主な成績、活動は次の

通りである。

- ・応援 安定した活動
- ・グリークラブ 部員数増え、明るい雰囲気で活動
- ・サッカー 全国高校総体予選埼玉県大会ベスト8
- ・スキー 女子回転・大回転インターハイ出場
男子関東大会回転・大回転出場
女子関東大会回転・大回転出場
- ・政治経済 経営シミュレーションコンテスト・本庄市6高校合同文化祭参加
- ・ソフトテニス 3年間無理なく成長できる環境の整備
- ・体操 時間をかけてしっかりと技術の習得
- ・ディベート 関東甲信越地区大会出場
- ・天文 稲稜祭でプラネタリウム上映
- ・バレーボール 県大会・関東私学大会出場
- ・ブラスバンド 吹奏楽コンクールA部門地区大会銅賞
定期演奏会
学校行事等での活動
- ・野球 秋季県大会ベスト16
- ・落語 稲稜祭ステージに全力を注ぐ
- ・ラグビー 新人埼玉県大会ベスト8
全国大会埼玉県予選ベスト16
- ・陸上競技 男子 400mリレー・1600mリレー全国高校総体準決勝進出
男子 110mハードル県新人大会3
女子 800m県新人大会3位
女子走り高跳び関東選抜大会出場
女子槍投げ関東選抜大会に進出
- ・EMANON 個々の部員の興味・関心に基づく活動

④国内外交流・研修

a. 修学旅行

15年度の修学旅行は、北京・台湾・韓国の3コースを予定していたが、韓国コースは中東呼吸器症候群（MERS）の影響のため、7月に中止を決定し、同コース参加予定者は台湾コース（新台湾コース）に変更した。結果的には、北京コースと台湾2コースで行なわれた。台湾の2コースは旅行業者が異なることもあり、学校交流を除き、全く別の旅程となった。コースの選択は、例年通り、生徒自身の希望により行なわれた。

コース別の参加人数は、北京コース52名、台湾コース109名、新台湾コース124名であった。各コースとも事前学習から研修テーマをしぼって準備をしたことで、現地では充実した時間を過ごし、貴重な体験を得ることができた。特に、北京大学附属中学（北京）・台中第一高級中学（台湾）での学術・スポーツ・文化交流は、国や文化を越え、いかに共存共栄していくかを考える良いきっかけとなった。

北京コースは予定通りの旅程で実施できたが、台湾の2コースは大型の台風の影響によって、前半は旅程の変更を余儀なくされた。しかし、限られた条件の中でも様々な異文化体験ができ、生徒は十分に満足できたようである。

b. 海外からの訪問交流

4月22日（水）に台北市立建国高級中学の生徒30名が来校した。稲稜ホールでの歓迎式ではバディマッチングを行ない、ESS部、ブラスバンド部、生徒会執行部の活躍のもと、和やかな雰囲気での交流が始まった。その後、理科の授業に参加し、食堂でランチを共に楽しみ、さらに放課後には理科課題研究に関して同中学と本学院各2本の発表を行なった。同中学、本学院とも科学のプレゼンテーションに力を入れており、大変有意義な時間を共有することができた。

また、5月26日（火）には国立台中第一高級中学の生徒54名が来校した。同中学には本学院の修学旅行団が毎年訪問し交流しているが、今回は本学院でキャンパスツアー、授業参加、放課後のクラブ活動参加を通して交流した。

2校との交流では教員同士の昼食交流も行なわれたが、そこでは茶道部がお点前を披露し、また閉会式では本学院の応援部やグリー部が活躍し、2校は日本語の歌を含めた出し物を披露し、大変充実した交流となった。

c. 留学

14年9月からアメリカに留学していた第1学年男子生徒1名が8月に復学した。一方6月から留学していたアメリカからの女子留学生2名が7月に帰国し、9月から留学していたアメリカからの男子留学生が2月に帰国した。

⑤SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

本学院は02年に本制度開始とともにその指定を受け、以後、05年に再指定、10年に再再指定されて現在に至っており、全国のSSH校の中で最古参である。15年度、16年度は経過措置校として活動を継続している。15年度実施した主な活動等は以下の通りである。

1) 河川調査プロジェクトおよび本庄市立藤田小学校との連携活動

本学院は09年度より、大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・地元NPO法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内2河川の環境調査活動を実施している。15年度も藤田小学校との連携で春秋2回実施した。

2) 藤田小学校の年間講師

12年度より、藤田小学校5・6年生の年間総合学習の講師を本学院生徒がつとめている。内容は、河川生物や環境に関わる事、科学への興味関心を高める事、プレゼンテーションスキルを中心としている。15年度は計10回の授業を行なった。また藤田小学校の文化祭である「藤っ子祭」でも本学院の生徒が講師を務めた。

3) Singapore National Junior College (NJC) との交流活動

7月16日（木）～23日（木）に生徒9名をシンガポールに派遣し、様々なプログラムを実施した。交流の軸は共同研究であり、5つのテーマについて実験・ディ

スカッションを行なった。また事前事後にテレビ会議も行なった。

10月26日（月）～11月1日（日）にはN J Cからの生徒・教員11名を本学院に受け入れ、各種博物館におけるワークショップ、オリンピック青少年センターにおける合宿交流、授業交流・文化交流・共同研究ミーティング、実験教室、河川調査などの科学教育プログラムを行なうとともに歓迎お茶会等の文化交流を行なった。

4) 南三陸研修

13年度より、生徒が東日本大震災の被災の様子を自分の目で確認するとともに、復興について課題意識を持つ事を目的とし、地域N P Oとの連携のもと、この研修を実施している。15年度は松島湾におけるアマモ再生活動、南三陸町伊里前川における河川調査、漁協での講義、場所を移し南相馬市で原発事故当時の様子と復興の課題に関するレクチャーを実施し、生徒15名が参加した。

5) 静岡北高等学校科学技術フォーラム（SKYSEF）

8月8日（土）～11日（火）にS S H校である静岡北高等学校主催の国際高校生学会に生徒2名が参加して研究発表・課題研究・企業見学等を行ない、環境部門の研究発表で審査員特別賞を獲得した。

6) 小笠原研修

8月25日（火）～8月30日（日）に生徒9名の参加により実施した。小笠原母島で南端南崎への縦走過程での希少植物や外来生物の観察・陸生マイマイに関するワークショップ、海洋生物の観察を行ない、父島では夜行生物に関するナイトツアー、自然保護区である南島においてワークショップを行なった。また母島では、小学生対象に子供科学教室を実施した。

7) Japan Super Science Fair (JSSF)

12月20日（日）～25日（金）に立命館高等学校が主催した大規模な国際高校生学会あるJSSFに生徒3名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち1名はN J Cとの共同研究発表であった。

8) S S H成果報告会

本学院のS S H事業成果の社会還元を目的とし、成果報告会を11月18日（水）に開催した。

9) Thailand-Japan Student Science Fair (TJSSF)

このフェアは、長くタイの中等科学教育推進に尽力してきたMaha Chakri Sirindhorn王妃の60歳の誕生日を記念し、日本から200名、タイから300名の生徒・教員が招かれて、12月に開催された極めて大規模な国際高校生科学フェアである。Phetchaburi 県にあるPrincess Chulabhorn Science High School Phetchaburiで開催された。日本からは25のS S H校が参加したが、本学院からは6名の生徒が参加した。

10) Mahidol Wittayanusorn School (MWITS) Science Fair 2016

このフェアは、タイで最初の科学教育専門校であり、本校と2005年以来長く交流を続けているMahidol Wittayanusorn Schoolで毎年開催されている世界規模の高校生科学フェアである。1月25日（月）～2月3日（水）に開催され、生徒10名が参加し、物理部門、プレゼンテーション部門で第2位を獲得した。またフェア

の後、学校間交流活動を行なった。

11) 親子科学教室

S S H事業成果の地域還元を目的とし、毎年夏冬の2回（出張授業を含む）、本学院実験室で親子科学教室を開催している。15年度は7月26日（日）、12月27日（日）にのべ8講義（各講義親子20ペア）を行なった。

12) 各種講義等

S S H輪講「これがサイエンスだ！」（6回）、「これがデータ分析だ！」を行なった。

13) 表彰・成果

2015年度朝日科学技術チャレンジ（JSEC）において、「日本の小河川環境に適した超小型水力発電機の開発」が優等賞を獲得した。

英文ジャーナル紙『Flora』（11月26日）に次の記事が掲載された。

“Light and SEM observation of opal phytoliths in the mulberry leaf”

O. Tsutsui, R. Sakamoto, M. Obayashi, S. Yamakawa, T. Handa, D. Nishio-Hamane and I. Matsuda

⑥ S G H（スーパーグローバルハイスクール）

本学院は制度開始2年目となる15年度に初めてS G Hの指定を受けた。構想名には「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」を掲げ、初年度はコア人材の育成及び構想の核となるマイクロプロジェクトを推進することとなった。15年度にS G H事業に関連して実施した主な活動は以下の通りである。

1) S G H Senior Staffの立ち上げ

各マイクロプロジェクトのリーダー役、成果報告会の実行委員役、その他S G H事業の推進のためのコア人材育成のため、S G H Senior Staff（生徒S G H委員）を立ち上げた。プロジェクトの実施に向け、ミーティングを重ねる中で、16年度に予定する”Pre-WaISEC”のあり方についても検討した。

2) マイクロプロジェクト

ア．グローバル社会と人権（教材開発と沖縄フィールドワーク）

グローバル社会における人権問題への理解を深めることを目的に、貧困と社会的排除をテーマとするアクティブ・ラーニング型授業を実施、教材化した。また、12月には沖縄の米軍基地問題を考えるフィールドワークを実施し、沖縄尚学高校との共同学習や大学・新聞社へのインタビュー、巡検などを行なった。

イ．紡績業を軸とした教科横断型授業

埼玉北部・群馬と中国長江デルタ地域の紡績業を中心とする日中関係史の学習、中国の高校生との共同研究のための準備を行なった。10月には本庄市の競進社模範蚕室・富岡製糸場を見学し、12月に特別講義と江蘇省蘇州中学訪問、上海などの現地調査を実施した。

ウ．インバウンド観光プランの協働学習

11月、パートナー校であるSingapore National Junior College（N J C）の訪問団とともに、「ナショナリズムとツーリズム」をテーマとするグループデ

イスカッションと交流を行なった。そこで得られた成果をもとに、3月には8班20名による国内フィールドワークを実施し、インバウンド観光についての調査を進めた。

エ．ワールドユースミーティング（WYM）参加／オンライン交流で進める発信型プロジェクト

日本福祉大学主催のWYM（8月）に生徒9名が参加し、SMA N2 Yogyakarta（インドネシア）との協働研究・発表を行なった。同校とは7月からオンラインでのコラボレーションを開始し、直前合同合宿などを通じて準備を進めた。

また8月から2月にかけて英語雑誌FPの協働制作を行なった。

オ．安養外国語高校とのテーマ学習型交流

10月～2月に朝鮮での植林事業で知られる浅川巧の思想をテーマとして、安養外国語高校（韓国）との学習交流を行なった。3回の事前講義、同校生徒の訪問団を受け入れての共同ワークショップ・プレゼンテーション、浅川巧関連施設へのフィールドワークなどを実施した。

カ．国際共生学を踏まえたボランティア活動

WAVOC（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）研修会、フィリピンのマングローブ植樹研修会、ネパールの貧困への支援活動についての研修会を実施し、プロジェクトチームの編成を進めた。

3）稲稜祭での中間報告

稲稜祭において、校舎内の一画でポスターセッションを実施した。進行中のプロジェクトについてまとめたポスターを掲示し、来場者に対してSGH Senior Staffによる説明と質疑応答を行なった。

4）成果報告会

2月、卒業論文報告会とあわせてSGH成果報告会を開催した。主要なプロジェクトの進捗と成果、今後の展開についてSGH Senior Staffのプレゼンテーションと意見交換を行なった。

⑦高大一貫教育

a．学部説明会

第2学年を対象に以下のように学部説明会を行なった。

5月30日（土）、午前中に早稲田キャンパスにおいて、政治経済学部、法学部、教育学部、商学部、社会科学部、国際教養学部の各学部教員が説明を行なった。午後は戸山キャンパスと西早稲田キャンパスに分かれ、戸山キャンパスでは文化構想学部と文学部の教員による説明、西早稲田キャンパスでは本学院OB・OGによる理工3学部の紹介とOB・OGのアテンドによる理工キャンパスツアーがも行なわれた。

10月2日（金）には、学年行事として所沢キャンパスにおいて学部説明会を行なった。人間科学部、スポーツ科学部の説明を受け、キャンパスツアーを行なった。

いずれの説明会とも生徒たちは熱心に参加しており、質疑応答も活発に行なわれ、進路に対する関心の高さがうかがわれた。一方、各学部の紹介したいこと（学際性、

語学教育、留学制度等）と生徒の知りたいこと（専攻できる分野の具体的内容や適性、進路の傾向の他学部との違い等）の間にギャップがあり、高い目的意識をもった進路選択やミスマッチの予防のためにも、紹介内容についてのリクエストをいかに反映してもらうかが課題であると思われる。

b. 理工3学部説明会

6月13日（土）に西早稲田キャンパスにて理工3学部による「附属・系属校生徒のための進学説明会」説明会が行なわれた。対象は第2学年理系進学希望者および第3学年理系進学希望者であった。生徒は教室を移動しながら、自身の興味のある学部・学科の話聞いた。また当日午前中に本学院独自の取り組みとして、希望者に対して応用物理学科、建築学科、電気・情報生命工学科、機械科学・航空学科の研究室訪問を実施した。生徒たちは、研究の現場を垣間見ることができ、進路の参考とすることができた様子であった。

c. サマーセミナー

7月16日（木）・17日（金）に開催した。初日午前中は大野高裕理事の基調講演「今、やっておくこと～大学生活を輝かせるために」、3名のパネリストによるパネルディスカッション「私は何系？」を行なった。

大野理事の講演は附属校生としての自覚を高めるため、パネルディスカッションは進路選択に向けての意識づけに大いに役立つ内容であった。

初日午後および2日目は、13学部から17名の教員を招き、また本学院非常勤講師1名と併せ18の講義を行なった。講義内容はどれも非常に興味を引くものであり、学部進学におおいに参考になるものであった。参加延べ人数も14年度より185名の増加となっており、大学本部と離れた場所にある本学院生徒にとって今後も発展させていくべきプログラムであろう。

d. 進学準備ウィーク

15年度は推薦学部発表の翌日（1月27日）から2月2日までの1週間で実施した。本行事は2年目であるが、期間中の3、4時限目を学年全員が集まる「コアタイム」とし、同期生との絆を深め、かつ大学生活をイメージできるようなプログラムを設定をした。1、2時間目と5、6時間目は進路別に学びを深める時間とし、演習やワークショップを行なった。また、SGH指定初年度でもあったので、4つのSGH講演会を開催した。内容は次の通りである。

< 3、4時間目の講演会等 >

- ・ 学生生活課、GEC、留学センターの役職者を招いての講演
- ・ 専任教員の最終講義
- ・ 本学院卒業生等による大学体育会・サークルの紹介
- ・ 本学院卒業生による学部別セミナー「学生生活について」
- ・ クラス対抗球技大会
- ・ 選択科目「ア・カペラ」・「合唱」発表会

<SGH講演会>

- ・全員対象特別講演会「『国際人になればいいな』と思うあなたに一真の国際人を目指すために」講師：ピーター・フランク氏（数学者）
- ・文系進学者対象特別講義「グローバル化する世界でのグローバルな思考のために」講師：古賀毅氏（千葉工業大学准教授・本学院非常勤講師）
- ・文系進学者対象特別講義「グローバル化時代の安全保障－沖縄の基地問題をどう考えるか？」講師：羽田真氏（本学院教諭）
- ・教育学部・人間科学部・スポーツ科学部・国際教養学部進学予定者対象特別講義「グローバルとは世界を知ることなのか？」講師：長拓実氏

事後アンケートによると、全般的な満足度は、学部・学科ごとの講座が多く設置された理系が最も高く、設置の少なかった人文・学際系グループが最も低かった。本学院卒業生による「学生生活について」を筆頭に、学部別のセッションは進路を問わず好評だった。個々の生徒が自身の進学先により密接につながると感じさせる講座ほど満足度は高かった。問題点は、プログラム編成の準備が遅れたため、講師の手配が間に合わなかったことである。特に約2割の生徒が経済・経営系の学部・学科に、約1割の生徒が法学部に進学するにもかかわらず、その分野に特化したプログラムを準備できなかったことは反省しなければならない。

14年度・15年度の実施によってプログラム編成の概要と要領が見えてきたので、今後は早めに計画に着手してより充実した内容のプログラムを提供できるようにしたい。

e. 学部開放科目

15年度は高校生対象学部開放科目の履修者は0であった。早稲田キャンパス等への移動時間の関係で、生徒の受講は実質的に水曜日と土曜日に限定されるとはいえ、受講者がなかったことは残念である。高等学院（上石神井）の受講者数は春募集63名、夏募集13名を数える。生徒に対しても情報の周知を進め、履修者を増やすのが肝要であると思われる。

⑧生徒指導

本学院は、入学定員 320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。15年度は、14年度に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。第1は「本学院のよき伝統である自由な校風を維持していこう」ということ。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。第2は「尊厳ある一人の人間として、志や気概を持って行動しよう」ということ。多様なタイプの人が集う本学院において、互いに切磋琢磨していけるように目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。第3は「他者を思いやり、仲間を大事にしよう」ということ。いじめや中傷といった他者を傷つけるこ

とはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上にもつながっていく。校則が少ない本学院であっても、各人が思いやりをもって行動すれば、問題は生じないはずである。集会などで、こうした心構えを生徒に説き、しっかりと実践するように促した。上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。

15年度は生徒の問題行動による指導処置は8件で、内訳は、定期試験・レポートでの規則違反5件、遅刻理由の虚偽申告1件、いじめ2件で、18名の生徒が懲戒の処分を受けた。件数の割に処分を受けた生徒の数が多いのは、集団による問題行動があったためである。学院生としての自覚を持つよう繰り返し指導を行なうとともに、教員は生徒をより確実に把握するための取り組みを一層強化する必要がある。

Ⅲ．生徒

①生徒受入

a．入学試験全般

16年度入試の志願者総数は2,812名で、15年度の2,795名から17名増加した。は男子で76名減少、女子で93名増加であった。女子の志願者は増加を続けており、15年度ははじめて1,000名を超えた。都道府県別では、埼玉県志願者が減った一方、東京都志願者が大幅に増えた。

入学者数は男子207名、女子128名である。一般入試・帰国生入試で、3年ぶりに繰り上げ合格を出した。過去2年、入学者数が定員を約1割上回っていたが、16年度入試ではこれが解消された。

出身地別入学者数は次のとおりである。埼玉県出身者は3年連続で半数を割り、その割合(45.1%)は過去2年に比べても低い水準となった(14年度48.7%、15年度47.9%)。東京都出身者が昨年度より23名増え、26.6%を占めている。最終在籍中学校が海外である者は前年度と同数となった。

埼玉	東京	神奈川	群馬	千葉	他道府県	海外
151	89	16	15	10	13	41

b．入試広報

入試広報として、本学院開催の説明会(7月・9月・11月)、早大附属・系属7校合同説明会(6月28日)に加え、海外3コース(13都市、5・6月)、出版社・学習塾等主催の説明会(21会場23日)に参加した。受験生・保護者との個別相談件数は、男子776件(前年度比95件増)、女子514件(同122件増)であった。募集定員に比べ女子の割合が高い傾向がなお続いており、件数の増加も女子で大きかった。

学校見学案内は、海外在住者に限定して、入試期間・土日祝日・学校行事日を除

いて随時行なった。15年度は 126件となり、14年度(88件)から大幅に増加した。

c. 入学決定者の集い

16年入試後の入学決定者の集い参加者数は 288人であり、内訳は一般入試・帰国生入試男子 100名・女子53名、 α 選抜男子51名・女子32名、I 選抜男子 6 名・女子 6 名、地元指定校推薦男子 8 名・女子11名、一般指定校推薦男子 6 名・女子15人、合計男子 171名・女子 117名であった。事後のアンケート結果によると、入学後の不安が和らいだ、入学後の学校生活が楽しみになった等、ほとんどが肯定的な感想であった。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年 2 回に分けて行ない、学外奨学金の案内も含め、LHR や本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集14名、秋季募集18名の合計32名である。いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は次の表の通りである。受給者の合計は25名であり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

奨学金名		奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の支給予約）		11
地方公共団体奨学金	埼玉県	9
	東京都	2
	神奈川県	1
	東松山市	1
民間団体奨学金		1
合計		25

また、各都道府県による授業料等軽減補助金・奨学のための給付金等を受けている者は、埼玉県88名、東京都42名であった。さらに国の制度である就学支援金受給者は第1学年 198名、第2学年 167名、第3学年 316名で、合計 681名となっている。就学支援金制度は14年度入学者より制度の改定が行なわれ、所得制限が設けられた結果、受給者が減少した。

b. 保健室

学校保健計画に基づいて運営した。

保健教育としては、各学年に健康教育講演を実施し、保健の授業と連携して、「心肺蘇生法の実際」実習の際に、教材としてAEDトレーナー、心肺蘇生法用ダミーを授業に提供した。また事務所入り口上部と2階ラウンジのモニター掲示板を活用した保健指導を行ない、感染症予防に努めた。モニター掲示板は継続的に注意喚起できるので、今後も活用したい。

教職員を対象に、A E Dの使用方法を中心とした救急法講習会を実施した。15年度はエピペンの実技指導もあり、生徒の実態に則した有意義な研修となった。ただ例年参加者が少ないのは問題であり、より多くの教職員が参加できるように日時を設定するとともに、教職員の意識を啓発する必要がある。

保健管理としては、生徒定期健康診断を全員に実施した。定期健康診断結果は学校医と共有し事後の措置に用いることができた。教職員健康診断は大学と連携して受診率の向上に努めた。また医師による健康相談（眼科・耳鼻咽喉科・歯科・整形外科）を実施し、生徒、教職員の健康問題をサポートした。

保健室利用は例年並みであったが、15年度はインフルエンザの流行が遅く、温習日も重なり、本学院では大きな流行には至らなかった。モニター掲示板やL H Rを活用した予防教育を徹底したことも効果的であったと思われる。

c. カウンセリング

毎週水曜日と土曜日の午後に、カウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。養護教諭には、カウンセラーと情報を共有し、家庭、組主任等とサポート体制を早期に構築するため、コーディネーター的役割が求められている。各ケースにおいて、より詳細な状況把握のために、組主任や教科担当からの情報が貴重であり、情報交換を密接にしていきたい。また、発達障害等を早期に発見し、大学の障がい学生支援室と連携した支援体制を確立することが課題である。

d. 共済見舞金

本学院では生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、保護者の経済的負担を軽減することを目的に、独自の共済制度を設けているが、全生徒から年額 5,000円を徴収している。15年度から、より公平でわかりやすいシステムを目指し、新制度の運用を開始したが、これにより、本規程の所管箇所である早稲田大学学生部が大学生を対象に運営する学生健康増進互助会の基本的な考え方やルールに沿った医療給付制度となった。

新制度になることで利用者および利用総額が増えることは予め折り込んでいたが、増加幅は当初の予想を超えた。すなわち14年度の実績は支給人数が延べ 345人（実数 227人）、支払総額が 1,646,250円で、例年並みの状況であったのに対し、15年度の実績は支給人数が延べ 533人（実数 216人）、支払総額が 2,696,557円と大幅に増加した。

延べ人数が増えたのに対し申請者実数が14年度とほぼ変わらないこと、支給上限額となる10万円支給者が7名に達していることから（14年度は0名、年間最高額は53,240円）、申請者・支給額に偏りが大きくなったことが判る。

16年度は、年間支給上限額の見直しなど新制度の改善を検討する必要がある。

e. 学校安全管理

キャンパスが浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や塀がない。そうした都市部のキャンパスとは大き

く異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。

現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員は日中6名、夜間は4名による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、大学の本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

東日本大震災の教訓を踏まえ、本庄消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を11月19日（木）に実施し、生徒の防災意識の増進を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招いて情報教育セミナーを行なった。

③生徒進路

a. 学部進学

15年度は 324名が卒業し、 319名が早稲田大学各学部へ進学した。各学部・学科・専攻・専修（基幹理工学部は学系）ごとの男女別の進学者数は、次の表の通りである。なお第1志望の学部・学科・専攻・専修に進学した者は 200名（62.7%）、第2希望のそれは32人（10.0%）であり、2014年度より、第1志望で16.8ポイント、第2志望までで16.1ポイント低下した。

学 部	学 科 専 攻 専 修			進学者数		
				計	男子	女子
政治経済学部	政治学科			28	13	15
	経済学科			33	18	15
	国際政治経済学科			12	4	8
法学部				44	29	15
文化構想学部	文化構想学科			20	14	6
文学部	文学科			17	14	3
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	5	5	0
			生涯教育学専修	1	1	0
			教育心理学専修	2	0	2
		初等教育学専攻		1	0	1
	国語国文学科			4	1	3
	英語英文学科			5	3	2

	社会科	地理歴史専修	6	5	1
		社会科学専修	10	8	2
	理学科	生物学専修	0	0	0
		地球科学専修	0	0	0
	数学科		3	3	0
	複合文化学科		3	0	3
商学部			32	20	12
基幹理工学部	学系Ⅰ		4	4	0
	学系Ⅱ		8	8	0
	学系Ⅲ		3	2	1
創造理工学部	建築学科		8	5	3
	総合機械工学科		2	1	1
	経営システム工学科		7	6	1
	社会環境工学科		1	1	0
	環境資源工学科		2	1	1
先進理工学部	物理学科		1	1	0
	応用物理学科		1	1	0
	化学・生命化学科		3	3	0
	応用化学科		3	3	0
	生命医科学科		3	1	2
	電気・情報生命工学科		12	9	3
社会科学部	社会科学科		15	9	6
人間科学部	人間環境科学科		1	1	0
	健康福祉学科		0	0	0
	人間情報科学科		3	2	1
スポーツ科学部	スポーツ科学科		3	3	0
国際教養学部	国際教養学科		13	8	5
合計			319	207	112

b. 他大学進学

15年度卒業決定者の中には他大学進学者はいなかった。

c. 退学

15年度中に3年生2名、2年生2名、1年生5名が、それぞれ一身上の都合により退学した。

IV. 研究活動

①研究成果

○著書（単著）

『境界の発見－土器とアジアとほんの少しの妄想と－』近代文藝社 15年12月

- 『韓国の焼物の恩に報いた日本人 合田好道～益子から金海進礼への民藝の展開～』 桜美林大学北東アジア総合研究所 16年 2月
- 著書（分担執筆）
- 『第二版 実践国語科教育法―「楽しく、力のつく」授業の創造』 学文社 16年 3月
- 注釈書（分担執筆）
- 『延慶本平家物語全注釈 第五本（巻九）』 汲古書院 15年10月
- 論文（単著）
- 「窯焼きと覆い焼き：熟履歴に注目した土器焼成技術の比較民族誌的検討」 『西アジア考古学』 16 15年 6月
- 「北魏政権下の烏桓」 『魏晉南北朝史的新探索』 15年 9月
- 「ネパールは周辺か？ 亜周辺か？：カトマンズ近郊の土器づくり民族誌から」 『貝塚』 71 15年11月
- 「ヨーロッパの理科カリキュラムPARSEL」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 34 16年 3月
- 「English as an official language: A comparative study of language policy in Japan and Rwanda」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 34 16年 3月
- 「つまようじを投げて円周率 π を求めよう！
― 課外授業「これがサイエンスだ！講義録―」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 34 16年 3月
- 「国家賠償法 1 条 2 項における「重過失」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 34 16年 3月
- 「北魏墳墓画像一覧（稿）」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』 34 16年 3月
- 「手描き地図からみたバングラデシュ農村地域の人々の空間認知」 『地域学研究』 29 16年 3月
- 口頭発表
- 「彩文定着に向けた施文法と燃料選択：2014年の焼成実験」（共同） 日本考古学協会第81回総会・研究発表会 15年 5月
- 「ジャワ、スマトラの土器づくり」 東南アジア考古学会第 239回例会 15年 6月
- 「土器をつくる女、名前を捨てる男：インドネシア・スマトラ島、ミナンカバウの民族誌」 人類学会第18回研究集会 15年 7月
- 「高校数学の反転授業における演習のあり方」 数学教育学会2015年度夏季研究会（関東エリア） 15年 7月
- 「数学の本質的な理解を促す理解を促す指導の研究」 日本数学教育学会第97回全国算数・数学教育研究（北海道）大会 15年 8月
- 「学校独自の情報プラットフォームを利用した反転授業の試み」 日本数学教育学会第97回全国算数・数学教育研究（北海道）大会 15年 8月

- 「日系ブラジル人によるハザードマップ基図の読図過程と地図表現との関わり」 2015年日本地理学会秋季学術大会 15年 9 月
- 「インドネシア、カリマンタンの土器づくり」 東南アジア考古学会第 242回例会 15年 9 月
- 「ネパール、カトマンズ近郊の土器づくり」 日本オリエント学会第57回大会・研究発表会 15年10月
- 「湿潤アジアにおける土器製作技術受容の諸相：民族誌情報にもとづいて」 東南アジア考古学会2015年度大会・会員研究発表 15年10月
- 「附属高校における数学学習観の調査」 日本数学教育学会第48回秋期研究大会 15年11月
- 「「足が速くなる授業」のための目標とする疾走技術と指導法についての研究」 日本スプリント学会 15年11月
- 「足が速くなる授業についての研究」 日本陸上競技学会 15年11月
- 「地方自治体における外国籍住民向けハザードマップの作成状況」 2016年日本地理学会春季学術大会 16年 3 月
- ポスター発表（共同）
- 「ジルコン中の微量元素濃度を用いた花崗岩質マグマへの堆積物混入量の推定指標の確立」 日本地球惑星科学連合2015年大会 15年 5 月

②学内研究費による研究

○特定課題（B）

- 「韓国の醸造・発酵陶器である甕器の通気性に関する実験考古学的研究」 180千円
- 「北魏墓室画像による北魏社会の研究」 225千円

○特定課題（基礎助成）

- 「インド・コルカタにおける土器づくり民族誌の研究」 240千円
- 「韓国の醸造・発酵陶器である甕器の通気性に関する実験考古学的研究」 240千円
- 「北魏墓室画像による北魏社会の研究」 240千円

③特別研究期間

- 「空間認知に関する日本と南アジアとの比較研究」
- 「地域との連携と教科横断型教育を志向する数学教育のあり方」

④研究紀要

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年 1 回刊行している。15年度は第34号を刊行し、論文 6 本を収録した。また新たな試みとして、従来の紙媒体に加え、P D F 版を作成し、本学院のホームページ上に掲載し、さらに中央図書館のリポジトリに登録、w e b 上に公開した（<http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/46948>）

V. 教育研究施設

①校舎整備

15年度は90-7号館（旧芸術科学センター）の改修が終了し、4月から新ホール（稲稜ホール、428座席）が稼働を始めた。同館には音楽室と図書室も設置され、同様に使用が開始された。

②学内施設

a. 教室

教室は普通教室23、ゼミ室4、理科実験・講義室5、情報処理室2、美術室1、体育講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、PC教室1、CALL教室1、大教室1で構成され、各教室にはIT機器とスクリーンが設置されている。

b. 稲稜ホール

15年度より新たに稼働した稲稜ホールは、学年集会や、各学年対象の課外講義、外部有識者による特別講演会、その他各種様々なイベント、音楽の授業やブラスバンドの活動、学外の機関の利用等を含め年間の利用回数は数十回を超える。本学院の教育活動上極めて重要な役割を果たしていると言える。

しかしながら1月の降雪により、図書室や音楽室の楽器収納庫に雨漏りが起こり、それに起因するカビが発生した。そのため改修後1年足らずで大規模な修繕が行なわれた。

c. CALL教室

最新のCALLシステム（CALLはComputer Assisted Language Learning の略で、コンピュータを使って語学学習を支援するシステム）を搭載した教室であり、学習時に各ディスプレイの上に設置されているカメラとマイク付きヘッドホンを利用して、対話形式で相手の表情を確認しながら対話練習することができる。

d. コンピューター

PC室（2室、各46名対応）では各机にPCが設置され、「情報」の授業や選択科目以外にも、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また休み時間・放課後は生徒に開放され、生徒の創作活動・研究調査活動に役立てられている。

e. インターネット環境

全ての教室にLANの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内3カ所に無線LANのポイントがあり、情報コンセントのない場所でもWIFIでノートPCやモバイル等のインターネットへの接続が可能である。このような環境のため、ノートPCやiPad等を持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

f. 体育施設

1) 学院体育館

95号館からの距離の遠さが問題である。体育の授業を始め学期集会や稲稜祭などの行事の際、移動に時間がかかるだけでなく、屋外を通るために雨天時の対応などにも多くの問題が出ている。クラブ活動ではバスケット部、バレー部、体操部、剣道部等が使用している。

2) 共通教室棟体育館

フロアーはバスケットボールコートが1面だけの広さであり、主にバドミントンと卓球の授業で使用している。しかし効果的な授業をするにはフロアーは狭く、使用できる種目も限られる。教員と生徒のコンタクトの便のために体育科教員室が設置されているが、校舎から離れているため、生徒の移動に時間がかかり、体育科教員が休み時間に生徒を呼び出すことが困難である。これは教員としては非常にストレスの感じることもである。クラブ活動では卓球部、バドミントン部、剣道部が使用している。高等学校教育において体育館の重要性は言うまでもないことである。生徒の落ち着きのある生活のためにも体育館の早期の建設が切望される。

3) サッカー場

サッカー場は十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができ、整備・維持活動も的確に行なわれた。降雪の影響は15年度も多大なものであった。南側のほぼ半分は日が当たらないため融雪が進まず、また水はけも悪く、およそ2週間使用できなかった。

4) ラグビー・陸上競技場

ラグビー・陸上競技場は十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。15年度は時間割の関係で、ハンドボールとソフトボールの授業も行なえるように整備した。倉庫が設置されているが十分な広さがなく、また使用勝手がよくない。今後検討の必要がある。

5) 野球場

野球場は十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができ、整備・維持活動も的確に行なわれた。ただ南側のソフトボール場の水はけの悪さ、三塁側のフェンスの低さは問題である。

6) テニスコート

テニスコート6面（クレイ4面・オムニ2面）は、クラブ活動では硬式テニス部とソフトテニス部が共用している。

7) 部室棟

部室とトレーニングルームから成る部室棟は95号館の玄関近くに設置されているが、各クラブの清掃・整理が徹底されなければならないであろう。

8) 屋外施設全般

グラウンド等の屋外施設から95号館に入る際、泥のついた靴のままで入ることも多いため、95号館校舎入口のマット等の整備が行なわれた。校舎を美しく保つ上で

も今後さらなる工夫が必要であろう。

g. 図書室

15年3月末に90-7号館内に図書室を移転し、4月より新たなサービスを開始した。立地的には、95号館からのアプローチが平地になったこと、生徒の日常的な動線の延長線上に位置することで、これまでの図書室に比べ利用しやすい環境となった。ただ95号館から離れた校地の東端にあることから、生徒の安全も考慮する必要がある。その対策の一つとして、ブックディティクションシステムを従来の目的のほかに学院関係者以外の入室制限用にも応用している。その他、図書室内に無線LANの環境を整備し、web環境からの蔵書検索を可能にしたこと、安全を考慮しつつ利用者が直接書庫の中に入り、資料を手にすることができるようにしたなど、新しいサービスも開始した。

多様な授業に対応するため、次のような閲覧スペースの展開を行なった。

- ・ 固定の閲覧机を排し、可動式の机及び教材提示装置を設置（1・2階各48席）
- ・ グループ学習が可能な、可動式パーテーションで区切ったテーブル席を設置（2階6席×4か所）
- ・ 開放感のある窓際カウンター席を設置（1階12席）
- ・ 従来の固定式閲覧席を設置（2階30席）

総席数は162席で、授業等で頻繁に利用されている。今後、授業や交流でさらに図書室利用が増えていくと予想されるが、早急に「利用に関する新しいルール」を作ることが必要であろう。

h. 保健室

ベッドは4床あるが、全部が埋まることもしばしばであった。保健室のベッドはあくまでも応急処置の範囲にあるので、症状の改善が見込まれない者は、早めに帰宅させ、受診させるよう指導を徹底したい。

保健室と学院体育館、共通教室棟、稲稜ホール等がかなり離れており、それらの場所での急な傷病への対応が遅れがちであった。対応が必要である。

i. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている（運営は早稲田大学生生活協同組合に委託）。生徒の食堂利用時間は、主に11時00分から11時20分までのコーヒードレイクと13時10分から13時50分までの昼休みである。食堂の座席数は442であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。付帯設備として、自動販売機4台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されている。

食堂は食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会（個別相談）や学年集会などさまざまな学校行事にも利用されている。

j. その他

早稲田大学は芸術活動の発展を目指し、「キャンパスがミュージアム」（芸術作品のキャンパス内展示により芸術作品と身近に触れ合える「場の創造」）を標榜しており、本学院でも大学が収蔵する絵画や写真の公開を積極的に進めている。15年度は次の絵画4点、写真1点が展示された。

『ローズの森 Foret de printemps』嶋田しづ	95号館 1 階会議室
『いつもの散歩道A』井上悟	95号館 1 階ワークショップエリア
『マンドリンのある卓上静物』笠井誠一	95号館 1 階ワークショップエリア
『丘を巡る日』藪野健	95号館 2 階交流ラウンジ
『本庄高等学院空撮2013.10.28』中村孝之	95号館 1 階ワークショップエリア

③スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。バスの台数・種類を変えて15年度を迎えたが、朝のバスのダイヤがあいかわらず過密であった。特に雨天の日等には本庄駅発の便に乗りきれない状態が慢性化し、始業時刻に間に合わない生徒が多く見られた。また4月から稲稜祭（10月）までの本庄駅行の最終バスも乗り切れない状況が続き、さらに長期休業中には往路・復路ともに満員で乗り切れない状況であった。生徒の安全、適正な生活を確保するためにも早急に解決しなければならない。

④早苗寮

早苗寮の受け入れ可能な寮生は全学年・男女総計で 136名である。新入寮生を募集する際、入寮希望者が多くその要望を 100%かなえることは難しく、16年度についても厳しい状況であった。学校説明会や入試説明会等において、遠方受験者であっても入寮を確約することはなかなか難しいという回答をし、広報でもそのように表現をしている。

教務、寮担当主任、寮委員、組主任等を中心とした定期的な学習・生活指導はほぼ例年通りに行なわれ、一定の効果を上げている。16年度以降もこれまでの経験を活かしつつ更に効果的かつ効率的な指導を実施することが必要である。

また寮自治会が自主的・積極的な動きを見せていて、年中行事の企画・運営はもとより、コンパクトで機動性のある班単位、フロア単位でも基本的事項の確認や日常の些細と思われる問題解決に積極的に取り組む姿勢が見られる。16年度は更にうまく機能していくと思われる。

VI. 社会・大学との連携

①保護者との連携

a. 保護者会

6月6日（土）と12月13日（日）に保護者会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、全体会の後、早苗寮保護者会も実施された。2回の保護者会とも9割前後の保護者が参加し、保護者の関心の強さが窺える。出

席率の高さは保護者の開催を土曜日・日曜日に実施したため参加しやすかったことも一因であろう。2回の保護者会で、保護者アンケートを実施し、本学院に対する保護者からの意見を聞いた。6月には34件、12月には13件の回答があり、本学院への様々な要望・感想が寄せられた。

②卒業生との連携

a. 同窓会

ここ数年の役員の尽力で、同窓会の体制が整ってきており、15年度の本学院教育との連携・協力体制も万全であった。本学院からのウィンターセミナーへの講師派遣、文化祭での展示等の依頼に対し、積極的に対応してくれた。

同窓会の活動自体も活発で、役員会は定期的に行われている。同好会活動では、ビジネス交流同好会、ゴルフ同好会など盛んに行なわれている。ホームページには、クラス会の開催案内、近況報告、リレーエッセイ等が掲載され、その情報は随時更新されている。また就職活動支援セミナーは学部生から好評を得ている。

本学院も同窓会との関係をさらに深め、同窓生の知的資源を活用することが重要である。

b. ウィンターセミナー

12月5日(土)に本学院卒業生10名を招き9件の講義を行なった。本セミナーは、生徒が先輩の経験談を聞いて、自分の将来を真剣に考えて適切な進路選択をし、本学学部学生、さらに社会人となる自己の将来の具体的なイメージを確立することを趣旨として行なわれている。

期末試験終了翌日の開催にもかかわらず、参加した生徒は熱心に聴講し、終了後時間を過ぎても多くの質疑応答が行なわれていた。また講師と教員での懇談会では卒業生の本学院に対する強い想いが伝わってきた。

③地域との連携

a. 本庄高等学院稲作プロジェクト

地域との連携を図る試みとして本プロジェクトを実施している。地元農家との交流を通じて、農業を取り巻く様々な事柄を体験的に学習することが目的であり、農業を軸に、多くの教科が横断的に取り組むことのできる企画である。15年度も美里町農林課と水田農家の協力のもと、6月上旬と9月中旬に美里町下見玉の水田で農業体験を企画した。選択科目「食文化」の授業時間帯に組み込む形で行ない、受講生35名が田植えと稲刈りを体験した。9月中旬の稲刈りは、本学の農業プロジェクトに所属する学部学生数名と一緒に体験した。その後、近くの農家宅に移動して農機具や作業場を見学し、現代農業についての意見交換もし、米作りのサイクルや営農に関する興味深い話を聞くことができた。農業を通じた地域との連携は着実に進んでいる。

b. 本庄高校生プロジェクト

本庄地方拠点都市整備推進協議会（会長：吉田信解本庄市長（本学院卒業生））による人材育成事業として行なわれている市内6高校の協働プロジェクトであり、15年度は六高祭に参加する形で関わった。本プロジェクトへの参加は、15年度が8回目である。参加する生徒は、毎年、「地域に根ざし、町と人に学ぶ」ことをテーマにしている。生徒にとって本プロジェクトは、地域との連携、学校間交流はもちろん、問題発見・解決(提案)型の学習の機会としても貴重な場となった。16年度以降も積極的な参加が望まれる。

c. 六高祭

8月23日（日）に、本庄市内の6つの高等学校が合同で文化祭を行なう「六高祭」が開催された。この六高祭は、本庄市合併10周年・はにぼんプラザ（本庄市新施設）オープンを記念して行なわれたもので、本学院からは、SSH部、軽音楽部、書道部、政治経済部、地歴部、ピアノ部、落語研究会が日頃の活動の成果を披露した。また、生徒会執行部のメンバーも実行委員として活躍し、委員長も本学院生徒が務めた。

d. ボランティア活動

SGH事業との関連で、国際共生、ボランティアや奉仕の精神に関心が深い者を募り、プロジェクトチームを組織し、計7回のミーティングを行ない、活動を始めた。その中で、ボランティア活動で先行するWAVOC（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）の活動を学ぶこと、「地球的問題群」の中の環境問題、貧困の問題を特に取り上げ学習することを計画し活動を続けている。具体的な活動は以下の通りである。

- 1) WAVOC 研修会（10月31日、参加生徒18名、講師：渡邊伶氏（教育学部3年生）「日本ルワンダ学生会議思惟の森プロジェクト」、沖田彩氏（政治経済学部3年生）「チャータースクールへの教育支援～ハワイ編」）
WAVOC から2名の学生を講師に招き、その活動の概要説明を受け、その取り組みについて学習し、今後の活動の方向性を議論した。
- 2) フィリピンのマングローブ植樹研修会（1月30日、参加生徒20名、講師：後藤順久氏（NPO法人イカオ・アコ代表、日本福祉大学教授））
地球規模の環境破壊の問題、その視点からのフィリピンにおけるマングローブ植樹の事業、さらにそれとともに行なわれるスタディーツアーの概要などを学んだ。
- 3) ネパールの貧困、少女売買についての学習（2月24日、参加生徒15名、講師：長谷川まり子氏（国際協力NGOラリグラス・ジャパン代表））
ネパールの貧困に関連して、少女売買春の実態とその支援活動について学習した。
- 4) プロジェクトチームの名称を「思い愛隊」とし、本庄市の特別養護老人ホーム「トマト村」において月2回（主に土曜日午後）補助的作業の支援。
SGH事業と直接関連しないものとしては、以下のような活動を行なった。
- 5) 第3学年生徒による全市一斉清掃
- 6) ブラスバンド部による本庄児玉病院での慰問演奏

7) 硬式野球部による少年野球チームとの交流

またWAVOC が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災復興支援を目的とし、宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し防災に役立てようとするもので、生徒21名が本庄キャンパスの本庄育苗地でどんぐりの苗木の育成を行なっている。具体的には、授業がある日は当番制で水やりと観察日誌の記録を行ない、また月に1回程度、学部学生やWAVOCのスタッフたちとミーティングを行なって活動を確認するとともに、プロジェクト参加者内の親睦を図っている。9月1日（火）～3日（木）には生徒15名・教員1名とWAVOC スタッフとで気仙沼植樹ツアーを行ない、実際に防波林の場所を見学し、現地の方の話を聞いた。

e. 施設の開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行っていない。しかし、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式に会場を例外的に貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

④教員の社会活動

a. 学外委員・学会役員等

おおくぼ山スポーツクラブ 代表
埼玉県高体連北部支部バレーボール専門部 総務委員長
埼玉県高等学校体育連盟サッカー専門部 常任委員（北部広報部長）
埼玉県高体連ラグビー専門部北部 副委員長
埼玉県高体連バレーボール北部支部選抜 監督
ラグビー四地区対抗戦北部チーム 監督
公益財団法人日本英語検定協会 英検面接委員
公益財団法人日本英語検定協会 TEAP面接委員
本庄市情報公開・個人情報保護審査会 委員

b. 学外講師・出張授業等

おおくぼ山スポーツクラブスポーツ指導研究会講師
東日本国際大学eラーニングコンテンツ「基礎数学」
東日本国際大学eラーニングコンテンツ「学びなおしの英語」
本庄市立南公民館「唱歌」講師
本庄市立西公民館「唱歌」講師
寄居町福祉課「健康ウォーキング・認知症予防講座」講師 15年11月
上尾市健康福祉課「健康ウォーキング講座」講師 15年10月

⑤教科書等の執筆

a. 教科書等の編集・執筆

『コミュニケーション英語Ⅱ』	数研出版
『国語総合』	東京書籍
『精選国語総合』	東京書籍
『新編国語総合』	東京書籍
『古典B』	東京書籍
『精選古典B』	東京書籍
『新編古典B』	東京書籍
『古典A』	東京書籍

⑥外部資金の導入

a. SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

基礎枠事業費

3,000千円

b. SGH（スーパーグローバルハイスクール）

受託費

10,000千円

⑦大学教育との連携

a. 教育実習

15年度は2週間（5月25日（月）～6月5日（金））および3週間（5月25日～6月10日（水））の実習生を計17名受け入れた。また、9月7日（月）～9月18日（金）の2週間に1名を受け入れた。実習に先立ち、5月14日（木）に打ち合わせ会を行ない、また実習期間の初日にはオリエンテーションを実施して、実習に際しての基本的な事柄を周知した。実習生は教壇実習に止まらず、体育祭前日の準備や当日の仕事も実習の一部として担当し、学校行事の企画や運営方法を学ぶ機会ももった。また放課後の課外活動にも積極的に参加していた。実習生にとって充実した期間であったと思われる。教育実習の反省会を2週間の実習生には、6月5日に、3週間の実習生には6月10日に行なった。

b. 競技スポーツガイダンス

本ガイダンスは、15年2月に開催された「コーチサミット（競技スポーツセンター主催）」の際の村岡功理事のコメントをきっかけに、「高大連携」・「競技力向上・育成」を目的に実施することになったものである。15年度は2回実施した。

第1回は5月13（水）に実施した。講師は石井昌幸氏（スポーツ科学学術院准教授・競技スポーツセンター副所長）、田口素子氏（スポーツ科学学術院准教授）、岡田純一氏（スポーツ科学学術院教授・ウエイトリフティング部監督）で、生徒212名、教員8名が参加した。また第2回は10月7日（水）に実施した。講師は長瀬エリカ氏（理学療法士・早稲田大学米式蹴球部トレーナー）、安達玄氏（元早稲田

大学野球部トレーナー)で、生徒82名、教員4名が参加し、他に高橋氏(NPO法人日本少年野球研究所)が加わった。

スポーツ選手としての栄養、トレーニング法、身体能力を伸ばすための日常の取り組み等についての新たな知見を得るとともに、高大一貫教育の多角的な展開に寄与するプログラムとなっていると考えられる。

16年度も各クラブの要望を集約し、内容の濃いガイダンスへと発展させる計画である。

c. 学部・大学院の授業担当

学部・大学院等における授業担当状況は次の通りである。

・文学学術院	1名
・教育・総合科学学術院	2名
・人間科学学術院	1名
・スポーツ科学学術院	1名

⑧募金

さらなる教育環境の充実に向け、10年4月1日から15年3月31日までの5年間にわたり「30周年記念教育環境整備・充実事業募金」を展開してきた。卒業生・保護者・教職員等の個人、団体、法人からの寄付件数は808件、寄付金額は77,110,787円となり、教育振興資金と合わせた件数・金額は、1,000件・1億2,600万円を超えた。

それを承けて15年度は、一定金額以上の寄付者を顕彰するため、寄付者芳名板(第Ⅱ期分、95号館1階)および座席プレート(稲稜ホール)を設置した。また寄付によって建築・改修された建物(95号館、90-7号館)を寄付者へお披露目し寄付への感謝を表すべく、9月12日(土)に見学会を催した。

16年度以降は、懸案となっている新体育館などの建設を目指し、募金獲得に向けてこれまで以上に幅広く活動を行なう必要がある。

VII. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

15年度は定例教諭会が11回(入試判定会、卒業・進級判定会は除く)、臨時教諭会が14回開催された。14回の臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が数回含まれる。16年度は、日常の生徒指導を更に充実させることにより、未然に問題の発生を防ぐなどの手立てを講じ、生徒指導を議題とする臨時教諭会の開催を抑制したいものである。

年度当初、会議時間の短縮化に留意したが、結果的には長時間にわたる会議が多くなり、目標は実現されなかった。これは特に新カリキュラムをめぐっての議論が多かったことによる。今後は、提案方法の見直し、発言の簡略化、議事進行の迅速化等を図る必要がある。

b. 委員会

15年度は14年度に比して1つ増加した17の委員会（2主任会を含む）が設置された。新設した委員会は「SGH委員会」で、これは地理歴史科、公民科に英語科と国語科、それに教務担当を加えて構成された。この委員会は本学院が15年度にSGHに指定されたことにより設置されものである。委員会は、1年間を通じてそれぞれの役務を果たしたと考えている。各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次のとおりである。

教科主任会：予算関係、図書、新カリキュラム関連（文理コースの卒業時の進路選択、進学基準点の扱い、卒業論文点の扱い、G選抜の検討、「大久保山学検討」の検討、年間行事の検討、卒業論文の提出遅れの処置、留学の扱い、その他教諭会審議事項の事前検討

学年主任会：奨学生の選考、生徒表彰の選考

生徒指導委員会：日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施

いじめ防止委員会：生徒間のいじめ問題発生への対応、いじめ問題に関しての外部有識者による教員研修実施

人権教育委員会：人権教育講演会の実施、人権教育の実践報告

寮委員会：早苗寮の生活指導、早苗寮規則の検討

広報・出版委員会：『杜』・『研究紀要』の編集・刊行

情報管理運営委員会：全般的情報の管理、授業評価の実施

入試検討委員会：入試区分定数の見直し、『学院案内』の入試部分の作成、一般指定校の決定、地元指定校への訪問と地元推薦生の各中学校からの推薦基準の調査、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、一般入試の繰り上げ合格枠の設定

施設検討委員会：新体育館フロアの具体的計画の検討

進路指導委員会：サマーセミナー・ウインターセミナー・進学準備ウィークの立案・実施、卒業論文報告会の準備・実施、学部説明会の検討、卒業論文の評価や提出時期等の検討

学校行事運営委員会：体育祭、稲稜祭の立案・運営、芸術鑑賞会の検討

SSH委員会：SSH事業の立案・実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、SSH成果報告会の立案・実施、文部科学省への年度末（中間）報告

SGH委員会：SGH事業の立案・実施、生徒SGH委員会の組織運営、各種交流事業や調査旅行への生徒引率、SGH成果報告会の立案・実施、文部科学省への年度末（中間）報告、SGH成果報告書作成

国内外交流委員会：建国中学・台中一中・NJC来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率

学校評価運営委員会：学校評価の立案・実施、報告書の作成

募金委員会・同窓会：同窓会活動への参加と協力

c. 教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の通りである。14年度から専任教諭が2名減少した分、非常勤講師が3名増加した。

教科別構成

教 科	専任教諭	非常勤講師	合 計
国 語 科	5	6	11
地理歴史・公民科	7	15	22
理 科	6	5	11
数 学 科	6	7	13
保健体育科	5	5	10
芸 術 科	1	2	3
英 語 科	8	9	17
情 報 科	1	2	3
家 庭 科	1	3	4
第二外国語	0	4	4
養 護	1	0	1
合 計	41	58	99

年齢別構成

資 格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
専任教諭	41	2	5%	10	24%	10	24%	12	29%	7	17%
非常勤講師	58	22	38%	15	26%	10	17%	6	10%	5	9%
全 体	99	24	24%	25	25%	20	20%	18	18%	12	12%

男女別構成

資 格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	41	35	85%	6	15%
非常勤講師	58	40	69%	18	31%
全 体	99	75	76%	24	24%

d. 教員の授業担当時間

15年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。14年度から大きな変動はない。

専任教員	13.9時間（除長期欠勤者）
役職者以外	14.6時間
役職者（学院長・教務）	8.3時間
非常勤講師	6.8時間

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の通りであり、14年度から大きな変動はない。なお専任職員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材サービス会社から派遣されている。

担当箇所・係	人数計	内 訳		
		専任職員	嘱 託	派 遣
事務職員計	20	8	2	10
事務所	13	7	1	5
事務長	1	1	0	0
学務係	6	4	0	2
庶務係	5	2	1	2
S G H 支援	1	0	0	1
図書室	4	1	0	3
理科準備室	2	0	1	1
物理・生物	1	0	1	0
地学・化学	1	0	0	1
メディアルーム	1	0	0	1
C A L L 教室	1	0	0	1
S G H 支援	1	0	0	1

③生徒の出欠席・成績処理

13年度より、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム「School N@vigator」を導入している。同システムはリレーショナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能である。ユーザーインターフェースとしてW e bブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がインターネット環境さえ整えばどこからでも可能になっている。今後は、生徒の保健管理や課外活動管理などシステム化されていない事項を含め、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。

具体的な運用は以下の通りである。

出欠席管理：科目担当者（教員）が毎時限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、成績通知表用所見を入力する。学校行事など出欠席の一括入力が必要となる例外対応や集計処理は職員が管理する。

成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への調査書提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なっている。

④広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は6月と12月に発行したが、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成された。『杜』は保護者の会「杜」編集委員会により年1回発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。14年度は3月に発行された。

ホームページ (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) を13年度に全面的にリニューアルし、提供するコンテンツ全体の統一感を重視して、ページ移動時の違和感や混乱を解消した。またタイムリーなニュースやできごとを継続的に発信しており、トップページの写真やリード文を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるようなページ運用を行なっている。

本学院保護者へ、迅速かつ確実に情報を伝達するため、15年度からFairCast® (N T Tデータ㈱提供) システムを導入した。災害・緊急時の情報伝達のみでなく、日常の事務連絡にも用いることで、システムを有効に活用している。